氏　　名：東原　亜希子
学 位 の 種 類：博士（看護学）
学 位 記 番 号：甲第 156 号
学位授与年月日：2017 年 3 月 10 日
学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当
論文審査委員：主査 森　明子（聖路加国際大学教授）
副査　堀内　成子（聖路加国際大学教授）
副査　八重　ゆかり（聖路加国際大学教授）
副査　形井　秀一（筑波技術大学教授）

論　文　題　目：骨盤位の妊婦が実施する灸(有煙・無煙)の頭位変換への影響

博士論文審査結果

本研究は、単胎・骨盤位の妊婦が妊娠 33 週 0 日～35 週 0 日の間に有煙棒灸もしくは無煙棒灸を行う場合（2 つの介入群)と、棒灸を施さない場合（対照群)とで、胎児の頭位への変換、分姫時の頭位、母児の well-being に違いがあるかを確かめるために行われた、3 群割付による準実験研究である。60 名 の妊婦を対照群(20 名)、有煙棒灸群(20 名)、無煙棒灸群(20 名)に割り当てた。対照群は棒灸を施さず通常ケアを受け、介入群は妊婦自身が自宅で有煙棒灸もしくは無煙棒灸を 1 回 20 分、1 日 1～2 回、10 日～14 日間継続した。その結果、頭位への変換率は、無煙棒灸を行った群 60%に対し、棒灸を施さない通常ケアを受けた群 25%であり、無煙棒灸群は対照群の 2.4 倍（相対リスク 2.40[95%CI 1.04-5.56]）有意に頭位に変換していた。一方、有煙棒灸群と対照群との間に有意差はみられなかった。分焼時の頭位の割合については、統計学的有意ではないものの、無煙棒灸群は対照群よりも 1.3～2 倍高くなる傾向が認められた。母児の well-being では 3 群間に差はなかつた。

審査においては、主に 3 つ指摘がなされた。第一に結果の示し方についての指摘である。介入後から 分焼時までの胎位の変化のフロー図が不明瞭であるので 3 群とも明確に表すこと、また、介入後および分焼時の頭位割合は、per protocol だけでなく、より効果を示すのに適した intention to treat 解析で外回転術を受けた妊婦も含めて作表し文中にも表すこと、さらに母児の well-being について帝王切開の転帰について詳細に作表し文中にも表すことが求められた。

第二に考察における不足の指摘である。2 つの介入方法の違いによる頭位変換への影響差に対し考察が深められていないこと。すなわち、単に有煙棒灸の有害事象としてだけでなく、無煙棒灸に対し有煙 棒灸で頭位変換に差がみられなかった理由について、有煙であることでの灸の実施への影響(熱量、実施回数、顔や手との距離など) も検討すべきであるとされた。

第三に結論における論理の飛躍についての指摘である。分焼時の頭位については介入の成果がみられなかったのに、次の研究課題として大規模な無作為比較試験の必要性を論じているのは飛躍があるとされた。今後の研究においては、厳密な灸実施回数と温熱刺激の確認、ランダム割り付け、症例数を増やした臨床試験の段階が求められた。これらの指摘事項に関しては、審査委員全員により、修正・加筆点 の確認がなされている。

分焼様式との関連で出産の安全性が問題となりうる妊娠末期の骨盤位は 3-5%と少数であり、希少な対象者をリクルートして行う介入研究は時間も労力も要するもので、プロセスも成果もどちらも高く評価できる研究であるとされた。また、一人一人が健康を考えることに意義や価値の置かれる時代において、妊婦自身が自宅で行うことができる灸のもつセルフケアの重要性も考慮できると評価された。

以上により、本論文は、本学学位規程第 5 条に定める博士（看護学)の学位を授与することに値する ものであり、申請者は看護学における研究活動を自立して行うことに必要な高度な研究能力と豊かな学識を有すると認め、論文審査ならびに最終試験に合格と判定する。